

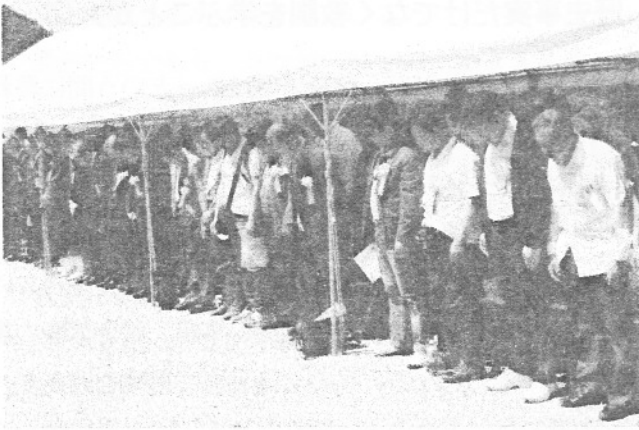
遺族たちと共に歴史に向き合う

加藤 陽祐

受難者を追悼し平和と友好を祈る

5月19日、前日来広した訪日団43人（うち受難者遺族は41人）が、「安野 中国人受難之碑」前で開催された第4回追悼式典（西松安野友好基金運営委員会主催）に参列した（参加者約100人）。

岡原美知子さん（中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会）の司会、長崎の長谷川忠雄さんの通訳で式典が始まり、死没者に黙祷を捧げる。



主催者の内田雅敏運営委員長が挨拶。初めに受難者・遺族に対して、「受難之碑」建立までの長い苦難をねぎらい、「受難之碑」をいつの日か「友好之碑」にしたいと究極の思いを語られた。和解事業の受難者・遺族へ補償金支給が207人、追悼式招請は145人になったと報告し、受難者・遺族探しに携わる中国側関係者に感謝の意を表された。また日中共同声明調印40周年の今年、この手作りの運動こそがその精神の実践であり、中国人強制連行の全体解決への道筋と展望された。最後に安芸太田町と中国電力に対し和解事業への協力を感謝し挨拶を終えられた。

次に受難者・遺族代表の邵義誠さんが高齢のため来広できず、挨拶文を女婿の張振倫さんが代読。日本軍国主義が起こした強制連行の非人間性、その解決は日本の友好団体の援助によったと感謝の意を表され、犠牲者29人の仲間の冥福と日中友好の永続祈ると結ば

れた。

高野康彦西松建設代理人弁護士は所要のため参加されなかったが、「歴史的責任を認識し、受難者・遺族に対して深甚なる謝罪の意」を表し、「安野 中国人受難之碑」が日中友好の発展に寄与することを祈るとの挨拶を司会が代読して紹介した。

来賓の挨拶にうつり、小坂眞治安芸太田町長が、「中国人受難之碑」建立の趣旨に照らし、教訓を生かして日中両国の平和・友好を深める努力をしよう、と地元の思いを表明された。このあと中国駐大阪総領事館の王磊領事、善福寺の藤井慧心住職、東保幸広島県議会議員が、「中国人受難之碑」を前に強制連行の歴史を反省し、真の日中友好をめざして努力する必要を各々の立場から述べられた。

竹内ふみのさんが奏でる二胡の調べが「受難之碑」広場に静かに広がる。往時の苦難、反省、そして受難者に思いを馳せるひと時。その中で献花が行われた。献花の後、遺族たちは石碑に刻まれた父祖の名前を探し涙した。異郷の地で恨みを残して亡くなられた方の遺族には、数十年の鬱屈が一挙にこみ上げる。胸を衝かれるこの光景、かつての日本が中国に何をなしたかがこのとき顕かになってくるのだ。

閉会后、遺族たちが碑前で紙銭を燃やして冥福を祈る煙が天に向かって立ち上っていった。

日中友好の記念撮影の後、遺族たちは父祖の血と汗になる貯水槽に登り、坪野の収容所跡を眼下に見て説

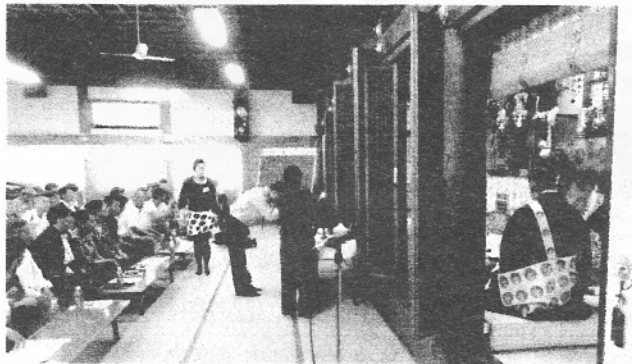


明を聞き、坪野での苦難を偲んだ。そして67年後の今も発電所が稼働して広島市民に貢献していることを知ったのであった。

善福寺で死没者の追悼法要

——日中不再戦・友好平和の願い

この後遺族たちは、1944年当時遺骨を預かり供養頂いたゆかりの善福寺で追悼法要に参列。川原洋子さん（「中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」事務局長）が死亡者の内訳を説明して法要が始まる。藤井慧



心住職が仏説阿弥陀経をお勤め下さった。そしてこれは皆さんのお国から伝来した仏典ですと説明してくださいました。

生きて帰国できなかった29人のうち訪日団として来広した2人の遺族・劉淑蘭さん（55歳、太田川で溺死した劉存山さんの孫娘）と呂素英さん（53歳、腎臓炎で死去した呂鳳元さんの孫娘）を紹介。法要を終えて、呂素英さんが挨拶し、遺骨を預かってもらった善福寺に感謝し、「今後日中は再び戦争をせず、平和に暮らしたいです」と声を詰まらせ思いを明かされた。胸を衝かれる訴えだった。

この後、谷キヨコさん（88歳、坪野在住、下の写真右端）の体験を聞いた。20歳ごろ、家の横をトロッ



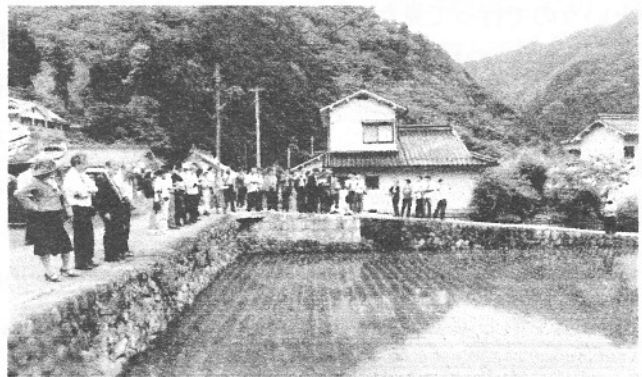
コの軌道が通り、中国の人が川のバラスを積んで押していた。巻き上げの時間待ちにこっそり家の庭に入ってきていた。台湾で戦死した私の弟ものどが渴いただろうと、母が水やジャガイモをあげていたと。1999年提出の法廷陳述書も読まれ、「来られた時は気の毒なほどやせていました。西松組の配下の島田組の人が棍棒を持って……」の部分が強く印象に残った。谷さんの心の中では、台湾で戦死した弟、叩かれて使われる中国人、同情する母親の姿が一体となって刻印されていると感じた。67年前の平和の原点だ。

収容所跡・過酷な労働をしのび涙

——逃亡と制裁

午後は収容所跡・労働現場を訪ねて太田川上流へ向かう。津浪の道の駅でバスを降り、尾坂秋三さんの陳述書を読む。衣食住の非人道的な扱いを述べ、「元気な者でも帰国できる人はいないだろうと思った」という。続いて岡田ヒデコさん（88歳）の陳述書。「捕虜の人は可哀そうでした。セメント袋を足に巻いて縄で縛って。1944年秋ごろから泣き声や叱る声が聞こえました。中国の人が後ろ手に縛られて家の梁に吊るされていました」と。22歳の時のことだ。

田植えが済んだ津浪収容所跡の道端。早苗の列の手



津浪収容所跡、現在は田んぼ

前に岡田さんの家がある。100人の生活の場とは信じ難い狭さだ。「敵国の捕虜」に同情し、手を差し伸べずにはおれない地元の人間的な心情は忘れられない。これが今日へ繋がった。

次は、今は林が茂る香草の第2中隊収容所跡へ。中学2年当時父親が監視員だった栗栖薫さんの話を聞く。

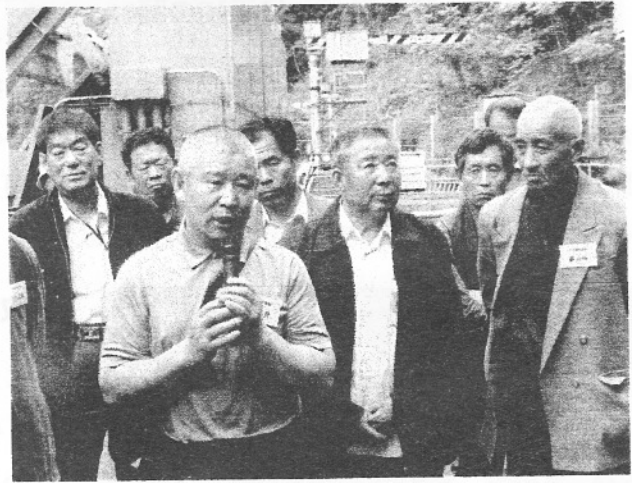


栗栖薫さん（写真右端）の話す衣食住は虐待と言えるほどのレベルだ。諄々と話してきて突然声を詰まらせ目を赤くしたのは、大雪になった1945年1月、100人居るのに地下タビは50足ほどしかないというくだり。交代ではき替えるか裸足で働くしかなかった。碎石を運び出す急坂のカーブで、度々トロッコが転覆。手書きの軌道の略図を見せながら、転覆事故で失明した宋継堯さんの苦難の人生にも言及、裁判の原告になり何回も来広して闘ったと友情と敬意をこめて話した。

最後に岡田ヒデコさんの証言の「後ろ手に吊るされた人」に触れ「ここ香草でもあったんです」と。「川上さん（華北勞工協会が中国人連行のために派遣）が見に来いというので行って見た」という。津浪とは違うやり方で凄惨な制裁があったのだ。「あまり話したくないが、伝えなければならないことの一つだった」と胸中の葛藤を覗かせた。遺族たちは涙ぐんで栗栖さんの手を取り肩を抱き合った。

第4中隊60人が働かされた土居の取水堰に向かう。坪野の発電所まで8キロを掘削した導水トンネルの出発点だ。一行は取水口の上の建物に集まった。この現場で働いた邵義誠さんの法廷証言を聞き、強制連行の人生への壮絶な影響を実感した。また陳立邦さんの証言も紹介。陳立邦さんは、伯父さん（陳洪蘭さん、1990年死亡）と一緒に連行され、伯父さんが八路軍第7連隊当時の仲間と便所の壁の下に掘った穴から一緒に逃げた。17人が山へ逃げ、夜が明けて全員捕えられ制裁を受けたという。今回来広した陳学升さん（58歳、右上の写真でマイクを持っている）は、洪蘭さんの孫に

あたる人で、「お祖父さんはここで大ケガを負った。帰国後も医者にかかれず、なかなか直らず苦しんでいた」と涙をこらえて話された。遺族たちは、父祖の体験を沈痛な面持ちで聞き、次々に質問をしていた。



安野発電所建設に関する行動はここで終り、最後に張振倫さんが訪日団を代表し、各施設の見学受け入れやトイレの使用など万端の配慮を頂いた中国電力（臺田課長ほか）に対してお礼の言葉を述べ終了した。

加害の歴史を深く考える

今回、現地の体験で想像より過酷な実態に驚いたという声を複数耳にした。一つには逃亡や制裁を裏付ける陳述書や証言の事実の重みがかかり伝わったと思う。父祖の受難の検証は、強制連行の真相解明を意味し、それは日中友好の基礎であろう。一方で遺族の世代交代が進み（今回41人中20人が孫の世代）継承が必ずしもスムーズでない点も窺えた。日本側も若い世代への継承は大きな課題なので、「受難之碑」の意義はこれから益々重要だ。多くの人に碑を見てもらい、共に歩き、深く考えたい。